

C 型肝炎について

はじめに

今回は薬害肝炎問題で話題となっている C 型肝炎にスポットを当ててみたいと思います。

原因は？

C 型肝炎の原因は、肝臓に感染する C 型肝炎ウイルスです。

感染経路は？

感染源は C 型肝炎ウイルスに感染している方の血液であり、輸血や血液製剤による感染が有名ですが、医療従事者の針刺し事故や母子感染、性交渉による感染もあります。なお、1989 年に C 型肝炎ウイルスの検査が可能となってから段階を経て、現在では輸血後 C 型肝炎の新規発症はほとんどない程度にまで激減しています。

症状は？

C 型肝炎ウイルスに感染すると、数週から数ヶ月の潜伏期間後に発熱や全身倦怠感などの感冒様症状が出現し、これに引き続き、食欲不振、悪心、嘔吐、黄疸などの消化器症状が現れます。ただし、不顕性感染といって症状に乏しい場合もあり注意が必要です。この急性肝炎の時期を過ぎると、ウイルスが自然に排除されて治癒する場合とウイルスが持続感染して慢性肝炎に移行する場合があります。C 型肝炎では後者の方が多いため、特に不顕性感染の場合には、知らないうちに C 型肝炎ウイルスに感染して、症状が出現した時にはすでに進行して肝硬変、肝癌になっていたということもあり得ます。

治療は？

各種の肝庇護製剤や特殊な治療ではインターフェロン製剤があります。

予後は？

前述したように、C 型肝炎ウイルスに感染すると、多くの場合、慢性肝炎となります。インターフェロン製剤による治療によりウイルスが排除できた場合は予後は良好ですが、無治療のまま経過したり、治療が不十分であると肝硬変となり、肝不全や肝癌の発生とともに予後は著しく不良となります。

おわりに

当院も西播磨地域肝癌対策協議に参加し、肝癌ゼロを目標に診療を行っています。その第一歩は採血検査を受け、自分が C 型肝炎ウイルスに感染しているかどうかを知ることです。特に輸血歴のある方は検診を受けるか、当科医師にご相談ください。

(文責 佐野 互)